

松本茂

私の「衰亡史」

3年前、東京を脱出してから「車内読書」というものを経験しております。小田原というシブイ街から喧騒の新宿までの75分の貴重な時間ができたからです。お陰様で、「ローマ帝国衰亡史」全11巻なる大著を1年ほどかけて読むことができました。

この書の著者 Edward Gibbon は1776年に書き始めて、巻末に1787年6月27日の日付をいれていますから、11年の歳月を要しているわけです。私の読んだ日本語訳の新訳は74年に中野好夫氏が手をつけて以来、後継者二人の手を経て訳したのが93年8月ですから、19年もかかっています。

200年以上も前の書ですから歴史書としては、かなりの修正部分もあろうかと思いますが、英国人ギボンの冷静な批判精神を基礎とした壮大な時間空間の遊弋は、誠に感動的です。

文化を支える最大のものが歴史の検証であるという当り前のことが、200年前のヨーロッパではしっかり実現していたのだなあなどと感心しながら読んでいました。

Far East、東洋の果てに生を受けた小生にとっても、西洋は誠に気になる存在です。日々の暮らしのすべてが絡め取られているわけですから、なんとしてもこの怪物と正面から対峙しないわけにはいきません。そのための一つとして、古代ローマという非ヨーロッパ的な文化が、どのような形でユーラシア大陸に影響を残していったかを実感するに

は、この「衰亡史」は格好の書です。

ことに、ここ数年手がけていたフランス装飾美術史教材の記述をしながら、彼等がその装飾思想と技法を成立させていった過程をたどってみたいものと常々感じていましたので、「衰亡史」に描かれた中世西洋の姿は本当に興味深いものでした。

しかし、1996年の日本国に籍をおく私にとっては、200年前のギボンが、当時の政治状況、文化潮流の中で、自らのアイデンティティーの源泉であるヨーロッパ誕生と生成の過程を、冷ややかとも言えるような鋭い視点で捉えている「歴史家」のスタンスは驚きでした。

振り返ってみるに、私たちの歴史的アイデンティティーはどこにあるのでしょうか。つい50年前、100年前はもちろん、古代史についてさえ「情報公開」されていないのですから、私たちはまだ歴史を獲得していないことになります。明治政府の「維新」は欧米帝国主義時代の暴風からの緊急避難であったのかもしれませんが、ここまで長く避難生活をさせられるのではたまったものではありません。

「歴史に目を閉ざすものは、現在にも盲目となる」というヴァイツゼッカーの演説に拍手を送って早10年の歳月が流れました。確かに私たち極東アジアの人間にとって、西洋社会なみの成熟度に達するにはいささかの時間がかかるのですが、ちょっと度はずれていないでしょうか。

このところの、神戸被災者の苦渋、血友病薬害被害者の怒り、子供社会の荒廃、オウム「事件」のいかがわしさ、政官業の猥雑さ、金融業者の鉄面皮、報道機関の脆弱さなどなど、「盲目社会」が白日のもとにさらけだされています。

私たちが正しい過去を獲得しなければ、この「盲目社会」は絶対に開眼しないでしょう。日本国という「国民国家」を今後も存続させるのであれば、景気対策などという気休めの投薬ではない、いささか痛い外科手術が要りそうです。私たちがそれに耐え得るのかどうかは、やや心許ないのですが間違いなく病状だけは進行して行くでしょう。

ここ数日の歯痛に耐え得ず、明後日に歯医者予約をした小生の等身大の現状認識です。



☆まつもとしげる
(株)生活美学社
小田原市
Nifty:RXL12052
INET;fwgc9196@mb.
infoweb.or.jp.

牛海綿状脳症

BSEのほんとの恐さはどこにあるか？

私は実のところ新聞もテレビも取っていない。ノンフィクションであると大上段に構えて実はホントのことが一つも含まれていないくだらないものにつきあっている時間は私にはない、のだ。情報の欠如は視野を狭くするという考えもあるが、自分にとって不可欠なことは自ずと耳に入ってくるし、狂った過剰な情報を取り入れ続けそれを信じてしまうことがどんなに危険なことか、松本サリン事件なんかを考えればよくわかる。

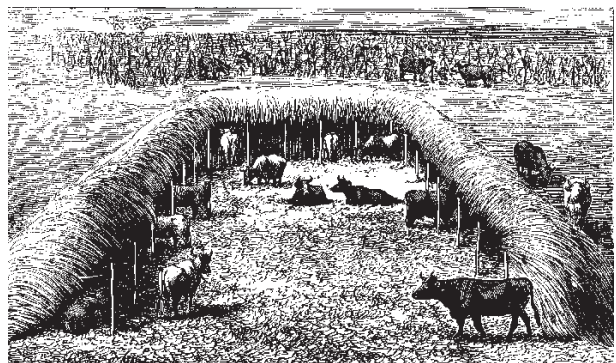
で、今回の牛海綿状脳症(BSE; 俗称狂牛病)の騒ぎも私は友人のひつじ仲間達から聞いた。この病気は1990年前後から学術雑誌他でも年に何回も特集され論文が発表され、ヒトとの関係も言及されていた。それは誤解を恐れずに言えば「なんだそんなこと。交通事故の方がよっぽど酷いや」程度のものである。それがいつのまにかひつじを汚らしいものとし、豚肉だって食べたくないみたいなことに日本中なっているなんて、まあ、ヒトの健康のためには肉食をひかえることはいいことだけど、あんたたちその前に考えることあるんじゃない？ 沖縄、原発、住専、安保に噴火津波震災の復興施策... ああどうしてワタシたちのマスコミは、これらを真剣に取り上げようとしないのか(まあ、求めているワタシたちも悪い)。

前置きばかりが長くなりましたが、BSEは牛のプリオン病の1つです。プリオンは酵母からヒトまでが普通に持つ蛋白質です。プリオン病はこのプリオンが何らかの原因で悪いプリオンに変身し、良いプリオンも朱に交われば... 式にどんどん悪い仲間染まっていき、特に神経系とリンパ系組織中にたくさんたまって病原体となり脳を海綿状=スポンジの様にすかすかにしてしまいます。

この病気はいろいろな動物にあって、遺伝的=家系的なもの(食べることで感染することも含めて)と孤発性(ときどきどこかで出る)のものと大きく2つのタイプが知られています。有名なものはひつじのスクレイピーとヒトのクロイツフェルト・ヤコブ病(CJD)、クール病、ゲルストマン・シュトロイスラー症候群(GSS)で、遺伝家系的なものはスクレイピー、クール、GSS。CJDは遺伝家系的なものは5%、残りが孤発性のものとされてきました。ひつじのスクレイピーは18世紀の終わりごろから

英国で知られるようになった病気です。この時代の英国は国を挙げてひつじの系統造成=改良してより儲かるものに仕立て上げることに取り組みました。そのひつじの1つ2つの系統の中の遺伝家系病としてあったスクレイピーが、めちゃくちゃな交配であつと言う間に英国全土に広まってしまったようです。まあ、AIDS、眠り病、古くは梅毒その他の病気と同じで、静かに生きていた？ 病原体を人間の手で広げちゃったんですね。

悪いプリオンが病気のひつじから外に出るのは今までの研究からはお産の後に出る「後産」としてのみです。つまり後産に触れる機会が多い、生まれたばかりの赤ちゃんひつじと同居ひつじそして後産をきちんと片づけなかったばかりに牧草地が汚染され、そこに放牧された羊に伝染します。もちろん脳等の神経や胸腺、ひ臓なんかも病原体はアルのですが、ひつじは共食いをしないし、毛皮やお乳や精液にはほとんど病原体は出てきません。さらひつじを食べる肉食の動物へは「筋肉にはほとんどプリオンはない」「種の壁=違う動物の間へは病原体は移行しにくい」と「プリオン病はかかってから発病までに時間がかかり、発病の状態も種によって違い、その遺伝情報も個々のプリオンがもっている(つまりひつじの悪いプリオンはひつじの発病までの時間と症状を制御している)」ので伝染しない、発病するまでに老いて死んでしまう、発病しないというわけでピーターの狼は海綿状脳症にならずに毎年ひつじを襲うことができたのです。



さて、こうやってひつじだけの病気をスクレイピーがなんで牛の海綿状脳症を引き起こしたのでしょうか。動物を人間の好み、牛ならば乳脂率が高い牛乳を出し、体格のいいものにするためには蛋白質を十二分に与えなければなりません。英国はもともと痩せた土地で、なあんにもできないから、よその国を侵略しそして少ない餌でどこでも生きるひつじを珍重し改良したのです。そんな

国に家畜に与える植物性の蛋白質なんてない。となれば、毛も肉も取ったあとのいわゆるヒトが食べない動物の部分、つまり神経や骨髄や内臓肉を蛋白質として再び動物に共食いさせるしか方法がないのです。これは英国にとって一番手っ取り早く安上がりな方法でした。

動物の残渣から蛋白質をとる方法にはいくつかありますが、極端に言えばフライにする、又は有機溶媒で抽出しこの有機溶媒を熱で吹き飛ばす、です。ここに約20年前石油の値段が4倍以上にも上昇したオイルショックがやってきました。そこで英国国内では動物残渣に対するフライの温度を下げ、有機溶媒による抽出法も中止して、つまり動物残渣にかける熱を低く回数を少なくしたのです。焼くこと、温度をかけることで科学物質や放射性物質以外どんな毒も無毒にすることが出来ますが、悪いプリオンのかたまりは熱に対して他の病原体よりも抵抗性があります。低く回数が少ない熱のかけ方では、悪いプリオンのかたまりをなくすことが出来なかったのです。

こうしてひつじのスクレイピーの20種類程ある悪いプリオンのうちのひとつがなんらかの形で変化して同じ反すう獣である牛へ伝染し、BSEを引き起こしました。そしてこのBSEにかかった牛の残渣をまた牛に与えたのでどんどん牛の間でBSEが広がっていきましました。BSE牛の残渣はペット他の餌にもされています。まだ確証はありませんが、これらを餌として与えられた動物園の反すう獣である鹿類や生のまま主食として大量に与えられた肉食獣、ペットのねこでも海綿状脳症発病の報告があります。

英国以外の国のBSE事情はどうでしょうか。穀物が豊富にとれるフランスでは牛に与える蛋白質はほとんど植物性です。アメリカは草原に放しっぱなしにしておく粗放飼育の最中は敢えて蛋白質は与えず、3歳過ぎの搾乳牛にやっと蛋白質を与え、1、2産したら牛はもう廃用にします（日本の牛はだいたい6産ぐらい、大切にする場合10産以上まで牛を養います。つまりアメリカは若い牛をどんどん更新するので、もしBSEになっていても発病前に淘汰されるのです）。

オーストラリアとニュージーランドは、国の随一の外貨獲得手段であるひつじを守るため、スクレイピーになったひつじを小屋ごと全部焼き払ってしまいました。そして、海外から輸入される牛ひつじなどの反すう獣に対して厳しいチェックを実施しています。（世界でスクレイピーがない国はたぶんこの2国だけです）。

日本は強い円又は某国の陰謀で海外から安い？穀

物＝蛋白質が豊富に買えることと、もともと肉の生産量が多くないので動物残渣の量が少なく、豚、鶏にいくらか動物性蛋白質があたえられている程度です。なお、日本の「フライ」の方法では悪いプリオンは死んでしまいますし、豚、鶏にひつじや牛の悪いプリオンを無理矢理にたくさん食べさせての実験でも自然でも世界で報告がありません。つまり種の壁が働いているのです。ただ豚は悪いプリオンを脳と腹腔と静脈の中に大量に一度に投与したら、海綿状脳症になったという実験結果があります。鶏も同じことをしましたが、発病しませんでした。（でも脳と腹腔と血管の中に一度にたくさんの悪いプリオンを入れちゃうなんて、ホラー映画でもやらないよなあ）。こんなわけで、BSEは英国関係牛でしか発病の報告がありません。

今回人間のプリオン病CJDと牛のBSEの関連が疑



SHELTER COVERED WITH STRAW.

われた原因は英国でのCJDの新しい症状のものが発見されたからです。CJDは普通平均年齢50歳（8～80歳）で10万人に1人の割合で発病する病気ですが、1994年及び95年に英国で見られた10例のCJDは若年齢層に発病し、かつ今までのCJDとは脳波のパターンが異なっていたこと、英国以外ではこの新しいCJDがまだ見つかっていないこと、牛の悪いプリオンの遺伝子のパターンの一部にヒトのCJDを引き起こす悪いプリオンに似た部分があることなどを考えると、消去法でBSEが疑われたのです。発病の件数が増えたわけではありません。現在本当に牛のBSEの悪いプリオンがヒトに「食べること」で伝染するのか。全くわかりません。BSEが増加した英国でCJDの発生が増加したとか、BSEに触れる機会が多い英国の獣医師や食肉関係者にCJDが多いとかそういう事実はまったくありません。

これはすでに300年近い歴史のあるひつじのスクレイピーとヒトとの関係も同様です。悪いプリオンの脳腹腔血管内接種ではなくプリオンのほとん

ど含まれていない肉や乳を口にすることで、ましてひつじのウールや牛の革を扱うこと、さらには豚肉鶏肉卵を食べることでヒトへの感染が成立する可能性はたぶん騒ぎ立てている 10 万分に一もないだろうと私は確信しています。まあ、スクレイピーや BSE が発病している肉をわざわざ食べないとか、スイートブレッド（若子牛の胸線＝英国人は以外に好き）や生焼けの脳やひ臓他内臓を好んで食卓に載せるのを止めるとか、肉はよく焼いてからヒトや動物の餌にするとか（これに関しては、豚や鶏や卵に関してもお勧めします。寄生虫やバイ菌が私にはよっぽどキケンだ）この程度の危機回避は交通事故より簡単にできると思います。

ほんとに怖いのは日本にひつじのプリオン病、スクレイピーを入れてしまい、無策のままというより積極的に日本中に広めてしまったのは、かの農林水産省であり、そのために多くの羊農場がスクレイピーの侵入から自分の羊を護るため大変な苦勞をしていること（このことに関して、農林水産省は知らないふりをしている）、またスクレイピーを日本から撲滅する対策をろくに実施せずに 10 年以上ほっておいたくせに、英国や世間にあおられてほんの形ばかりの検査を実施し「日本には（今のところ）スクレイピー（等異常を認めるひつじ）はない」と宣言していることです。

農林水産省官僚は厚生省のいわゆる「AIDS 非加熱製剤問題」をひつじで繰り返している。こんなこと、ひつじ関係者だったら多くが知っていることなのに、日本のマスコミはどこも書いてないでしょ？これがワタシが新聞もテレビも「取ってない」「怖い」理由です。

☆かたぎりつくね／獣医師／旭川；鹹になりそう

永田温子

Peace, perfect peace.....

前庭、玄関の 10m 先に春の小川が流れ始めました。ここはほとんど頂上、海拔 200m に位置しているので、どんどん水は下って行きます。例年、雪解け水を導くために浅く溝を掘り、これが年 1 回だけの春の小川になっているのですが、その期間は短かったり長かったりします。今年は山にわんさか雪があるので、多分 2 週間は流れ続けるでしょう。その日の気温によってざざと流れる日もあれば、さらさらと行く日もあり、又、夜中もちょろちょろと音をたてているのです。昔、田舎へ行って用水路に田舎の友だちと裸足で入って、ぴちゃぴちゃ歩いたことなど思い出しながら、はいたままの長靴をその中でこすり合わせて洗ったりすると、何だか楽しくなりますね。「春の小川はさらさらいくよー」などという歌を実感をともなって歌う人は、今どのくらいいるの？なんてことも思います。

小川には心はずむけれど、雪のせいでスロープに青草はまだほとんど出そろわず、従って今だに羊、山羊は小屋に入れられたままです。でも今朝の餌やりにもふと気付けば、山羊の Bebe のおっぱいとそのさきっちょが私の目の高さから見えていました。ピンク色でふんわりしていて・・・今までそんなことはなかったはず。ということは、ふくらんで下がってきている。お産が近い証拠でしょう。急に暖かい気分になりました。人間の男も、妻のこのような体型の変化に気付いて内心喜んでいたのでしょうか。ちなみに予定日は 5 月 7、8 日ごろです。山でのくらしに自前の蛋白質 = 自前のチーズ = 山羊となってから、2 年かかってやっと搾乳にたどり着きつつあるわけです。「お待たせいたしました」ということにきつとなると思いますが、山羊チーズの味は、実は日本ではそれ程ポピュラーなものではありません。決めてから、いろんな山羊チーズを食べるようにしてきましたが、初めから「おいしい！」と言う人や、反対に癖がありすぎると言う人と比べて、私は多少頭で食べようとしていて、「舌はあとからついておいで」という風に考えています。羊よりはぐっと多量、かつ個性的な山羊乳。事故死した生後間もない子羊をもらい受けて、過去何回かの解剖で塩づけや冷凍や干して保存してあるその第 4 胃を凝乳酵素にして、理科のわくわく実験室よろしく試行錯誤してみるつもりです。さっぱりとして酸味のある山羊のヨーグルトチーズや真っ白い山羊バターなどは日本人の嗜好にとっても合うと断言される、あるシェフに出会



SHEEP BARN.

この項のカットはいずれも

"Barns, Sheds & Outbuildings"

Alan C. Hood & Company, Inc. Original Edition 1881

えて勇気づけられています。あたり一帯にハーブの種をまいて、やがてそれを山羊に食べさせては？とか、秋のぶどう収穫時にぶどうの木灰を作ってそれをチーズにまぶしては？などともアドバイスされ、壮大な楽しみかつ体力仕事になってしまいそうです。

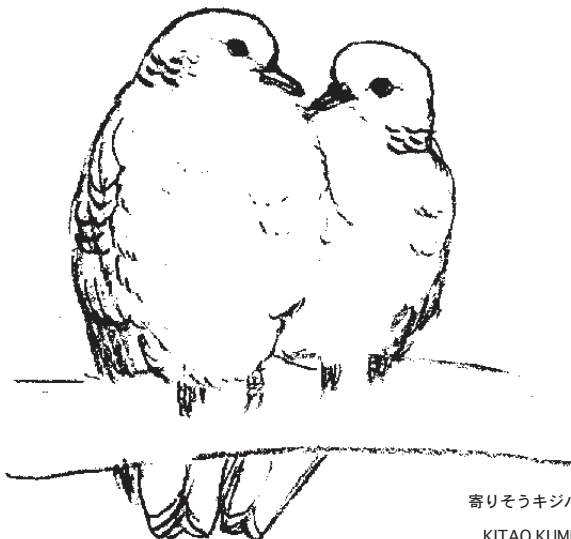
さまざまの壮大な(!)仕事の途中で、このごろはリラックスするのにもっぱらレゲエです。音楽については何でも屋なので、若人が買ってくるCDも十二分に活用しているわけですが、レゲエって、ウンチャウンチャのリズムが軽快なのに、注意深く聞いてみると意外なほど歌詞は重いのです。Peace, perfect peace, I cry for peace in this neighbourhood. Love, perfect love, I beg you for love in this neighbourhood..... この少し古い曲にのっていつの間にか大きく揺れていて、自分の心や身体は自在になったような気がするけれど、穏やかな日常を保証されている国や状況や人は本当に少ない・・・、今も変わらず。

☆ながたはるこ／小別沢・山羊²クラブ／札幌

北尾久美子

隣んちの鳥日記 パート3

心おどる季節がやって来ました。雪に埋もれているのも良かったけれど、木の芽がふくらみ、ふきのとうがぐんぐん成長するのを見ると気持ちが弾



寄りそうキジバト
KITAO KUMIKO

んで来る。1週間留守にしていた間に、あんなにあった雪山も一気に減り、地面が見え隠れする。雪解け水がせせらぎを作り、キラキラ反射している。さあ、夏鳥たちのお出ましだ!!はるか遠い、南より、海を越え山を越え、この地にやって来た、小さき鳥たち。目をこらしてみると、地面にまぎれそうな、スズメ程の鳥があちこちに動いている。胸をそらすと黄緑色が鮮やかに見えてくる。”一番のりはアオジだ!!”渡って間もないのか十数羽が群になって、せっせとエサをついばんでいる。渡りはとても体力を消耗すると言われ、中には体重を2/3に減らしてしまうこともあると言う。全エネルギーを使ってたどり着いている。身体を休め、少し落ち着いて来るといよいよ、自分の縄張りを見つけ、その宣言をするように、木のこずえで声高らかに歌いはじめる。”チョッピンチュルリーチーチュルリー・・・”のどかな声が春の始まりを伝えている。いつもは朝寝坊の私も、この季節だけは早起きとなる。目覚めると、まっ先に窓のそばにたち、ねぼけまなこを見開き、何か動くものを探す。”あれ?!なんだろう”頭の中の図鑑をパラパラとめくってみる。尾がちょっと長め、くちばしが短く丸い・・・”ベニマシコのメスだ。”4羽もいる。オスは美しいバラ色なのだがメスは地味な薄茶色をしている。夏の草原で見かける鳥だが、この時期は、渡りの途中で羽を休めるため立ち寄る鳥もいて、もっと高い山に住む鳥など何が通過するのか予想がつかない。とにかくどんな鳥が見られるか、ワクワク、ドキドキ、そして少し欲張りになる。

今シーズンになって初めて、見たり、鳴き声を聞いた鳥を”初認”とマークをつけて、メモをとってみる。ホオジロ、メジロ、コルリ、ルリビタキ、クロツグミ・・・新顔が次々とやって来る。

冬の間、留鳥として、仲良く混群になっていたカラ類も、今では、自分の相手を見つけ出そうと、やっきになって追いかけてを繰り返す。身体に似合わぬ大きな声でさえずりの合唱がはじまる。メスがまるで幼鳥のように羽を震わせエサをねだるポーズをとり、じらすように逃げまわる。追いかけるオスは必死になり、ライバルと戦い、さわがしく飛びかっている。枝先にはもうすでに、ペアになったキジバトが寄り添い、仲睦まじさを見せつける。相手の顔や首すじを、そっとつつくように丹念に羽づくろいを続ける。”春ですねぇ～”見ているこっちは早起きをしてるから、午後の陽があたるとつい、うつらうつらしてくる。春だよ、やっぱり・・・。

☆きたおくみこ／バードカービング作家
スタジオ ZERO 主宰／札幌

明峰哲夫

「もの」の世紀から「関係」の世紀へ

■時は世紀末

時は世紀末。世紀末と言っても、いつもと違って時間の流れが早くなったり遅くなったりするわけではありません。自然の推移も生き物たちの営みも“100年のくぎり”などとはいささかの関係もなく、ただ悠久に継続されていくばかりです。

時間や自然の流れはそうであっても、人間の歴史の流れは人間が作り出すものだから、人間が“世紀末”と意識したとたん、本当に“世紀末”という何か特別な時代がやってきてしまうのですね。

“時間”という概念を勝手にでっちあげた人間が、それ故にでっちあげざるをえなかったのが、“世紀末”という時です。人間はこうして“時間”に限らず様々な概念をでっちあげ、生きる動物です。アリやカエル、ケヤキやブナたちの生は恐らく“でっちあげ”などとは無縁でしょう。人間だけがあれやこれや勝手に決め込んで、一人で騒いでいる。

人間が勝手に決めた100年に一遍の“反省と展望”の時。それが“世紀末”というわけですが、人類の末席をけがす僕もそんなわけで、このところ色々と考えるところがないわけではありません。

■「もの」の時代

20世紀は「もの」の時代でした。「もの」はとにかく良きもの(goods)と考えられたのです。だからこの時代、ものを「つくる」ことは議論の余地なく正しいことでした。

莫大な化石燃料を消費する大量生産技術が開発されたのもこの世紀。この技術体系は単に工業で活用されただけではなく、農業部門でもフル回転しました。大量生産技術が導入された20世紀後半の40年間で、地球上で人類が収穫する穀物量は実に3倍にも増えたのです。20世紀はテレビ、電話、クルマ、コンピュータ、プラスチック、抗生物質などなど“文明の利器”が次々と大量生産され、それが“豊かな生活”の指標と考えられました。でも20世紀の人類の“繁栄”の基礎になっているのは、何よりも穀物の増産にあったということも忘れることはできません。

「もの」そのものに無前提に価値を認める社会では、「個別がまずあり、その集合・離散により全体が決まる」という考え方が主流を占めます。増えていく「もの」の量により家の大きさが決められ、増

えていく家の量により町の大きさが決まる。そして増えていく町の量により畑が潰され、山が削られ、海が埋め立てられていくのです。このような社会では、成長は確かに「無限」のはずでした。

20世紀は工業化の時代というわけですが、その末期には情報化社会に脱皮したと言われます。けれどもこの情報化社会も少なくとも日本などの現実を知る限り、工業化、つまり物の大量生産を前提にした社会でしかないように見受けられます。やや皮肉っぽく言えば、大量生産技術の確率で、暇を持って余した人間たちが“コンピュータゲーム”に熱中しているという感じ。

コンピュータは期待を見事に裏切り、紙の大量消費を一層加速しました。ある事情から紙がなくなってもコンピュータは存在し続けるのかもしれませんが、少なくともコンピュータが紙の大量消費を抑えることはできないと、証明されてしまったのです。

コンピュータは点を組み合わせることにより、自在に画像を描くことができます。まさにコンピュータとは、個別を集合・離散させ、無限に広がる全体を構成する装置なのです。言うまでもなく、これは工業化社会を支えた思想と手法にほかなりません。

■「もの」が「もの離れ」を呼ぶ

ところで大変皮肉なことですが、大量の「もの」に囲まれたこの時代、人々自身は急速に“もの離れ”に陥っています。これには二つの原因があると思います。

一つはあまりに「もの」が過剰なため、「もの」に対して“不感症”になってしまったこと。もう一つは、「もの」を作る大量生産技術が、大部分の人を「もの」を作る現場から放逐してしまったこと、です。ここでは情報技術は工業技術を支えようとしています。もの離れを起し、「もの」への関心や知識を失いつつある人々に、それでも「もの」を与え続けるために、一つひとつの「もの」の“能書き”が必要になりました。その能書きを作り、宣伝するのが情報産業の役割というわけです。

人々は「もの」に触れることで「もの」を知ることとはできなくなりました。その代わり抽象化された情報を与えられることにより、「もの」を知らされるのです。この事態がますます人々のもの離れを加速していくのは、言うまでもありません。

全体を要素に解体し、その要素を組み合わせることにより全体を再構成する。この方法でコンピュータは様々な仮想世界を作り出しています。けれどもこの仮想世界にたゆとう人間の官能は、緩慢に

衰えていくほかないのです。コンピュータゲームに熱中する子供たちは、生の人間や自然と交流するノウハウを手に入れることはできません。一人で室内に閉じこもれば、戸外の様々な出来事と接触する機会を失うし、さらに悪いことに、彼らがコンピュータで経験する世界は戸外の世界を模したもので、彼らから戸外に出ようとする積極的動機を奪ってしまうからです。

環境には「もの」が溢れ、そのなかに生きる人間は見事に「もの離れ」を起こす。まさに世は世紀末、と言うべきでしょう。この事態が何等変革されないまま、20世紀社会は21世紀を迎えることになりそうです。21世紀には20世紀のつけがそのまま回されるのです。

■「関係」の世紀へ

20世紀が「もの」の世紀だとすれば、21世紀はどのような時代になるのでしょうか。僕はそれを「関係」の世紀と考えたいと思います。

もはや「もの」は“goods”ではありえません(“bads”とでも呼びましょうか)。したがって「もの」を作ること無前提に良きことではなくなります。ある「もの」を作ろうとするとき、それを作るべきか作らざるべきかが、なによりも慎重に検討されるべきでしょう。それは「ひと」や、既にある「もの」との間にどのような関係を結ぶだろうか？それを作る過程は周囲に何をもちたらし、周囲から何を失わせるだろうか？

自然発生的に作り出される「もの」をただ「市場原理」に委ねておけば、落ち着くところに落ち着く、というノー天気な楽観論は破産しました。個別の集合が全体を形作る、という20世紀型の発想に対し、それを逆転させた発想が必要ではないでしょうか。つまり、ある全体がまず想定され、その中で一つひとつの個別の位置が検討される、という発想です。こうした発想に立って、「もの」が作られていくことがこれからは必要と考えたいのです。この発想からすると、全体は「有限」です。つまりあるワクがあらかじめ与えられている。この考え方は、例えば“スモールイズビューティフル”で有名なシューマッハーの思想のように、1970年代に既に編み出されたものです。けれども結局この思想は20世紀中に結実しなかった。少なくともこの日本という国では。

全体の中で個別が検証される、という発想が実際に社会で運用されるためには、いくつかの難題があります。「全体」とはそもそも何で、それは誰がどのように決めるのか。そしてその全体の中での個別の検証は誰がどのように行うのか。この課題

が解かれ、それに従う新しい社会的システムが創造されなければならないのです。このシステムはかつての共産主義国家のように、強大な官僚がでっちあげた「理想」に人々を暴力的に駆り立てるシステムではもちろんないでしょう。かといって、「最大多数の最大幸福」とばかりに人々の「単純多数決」に総てを依存するシステムでもないはず。様々な功罪をもたらした大量生産方式は、基本的には“合法的”“民主的”手続きにより作り出されたのですから。

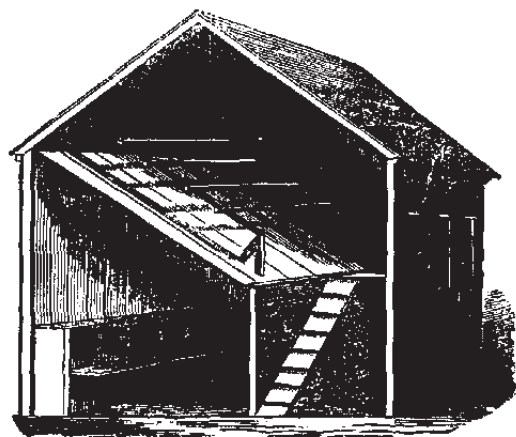
■まちづくりの現場から・・・

新しい社会的システムは、小さな地域を単位にしたまちづくりやむらづくりなどの現場で徐々に発見されるのだらうと思います。まち(むら)づくりとは、地域の合意のもとにまず基本構想が作られ、その構想に従って個別の計画が検証され、位置が与えられていくべきものだからです。まちづくりこそ、人々が新しい社会システムを発見する優れた実験場だと僕には思われるのです。

「もの」の時代。そこでは「もの」の生産をより合理的に行うために情報処理・情報操作の手法が利用されました。けれども「関係」の時代には、人々の合意形成、つまり何等かの情報処理がまずあって、その後「もの」の生産が続くということでしょう。とすればこれからの世紀にこそ、「もの」から解放された本来の「情報社会」が開花するのかもしれない。

☆あけみねてつお

農業生物学研究室・やぼ耕作団／東京・日野市



SECTION OF HEN HOUSE.
"Barns, Sheds & Outbuildings"
Alan C. Hood & Company, Inc. Original Edition 1881

私の住む網走地方はカラマツ林が多く、今間伐期を迎え、その用途に頭をいためています。木材やクラフトの知識のない私は無知をよいことに、その安さと豊富さに目をつけて様々なものを作って楽しんでいます。専門家には笑われるかもしれませんが、そのいくつかを紹介いたしましょう。

●六角形の薪小屋

家の暖房の80%が薪なので一冬の薪を蓄える薪小屋が必要です。2.5m丸太を六角形に組んで20段重ねて、鉛筆型のトタン屋根をつけました。不愉快な形をした灯油タンクも2台納め、一冬の薪が入る十分な大きさのものができました。

●木瓦の車庫兼物置き



5.5mの丸太を12段～15段三方に積み、一方に入口をつけ、屋根は片流れ、木瓦葺きにしました。木瓦という言葉があるかどうか知りませんが、丸太を半割りにして、芯をV型の溝に切り、上下たがいちがいに組みあわせたものです。古い北方住宅にこんな屋根があったように思いますが、この上に土をのせて草でも生やせば、立派な縄文人の家になりそうです。蛇足ですが、Vカットした芯の部分は丸太の壁の隙間を内側から埋める材料にしました。

薪小屋も車庫も私の住む雑木林にはとてもしっくりしています。

●丸太のジャングルジム

近くの養護学校の運動広場に子供たちの遊具を頼まりました。かねて金属やプラスチックの遊具に



疑問を持っていましたので、喜んで引き受けました。

径20cm～25cmの防腐、防割、ヤニ止め処理した丸太を15本、間隔を約45cmにしてランダムに立て（高いもので3m）、径6cmの横木を3才の子供が登れる程度の段差で取り付け、丸太のてっぺんにはこの辺りの動植物のオブジェを付けました。ブランコやゆりかごや動くきつつきなども付けました。運動能力が3才児という制約があって、大きなものは作れませんでした。一般の児童公園などでも作ればおもしろいと思っています。今後は展望台のあるバス停や、雪やつららでオブジェ化する電話ボックスなど考えています。また、カラマツ材を使った造形を考えるために私はバルサ材の丸棒で1/10～1/20の模型を作ります。

次回はカラマツの「うるし器」をご紹介します。

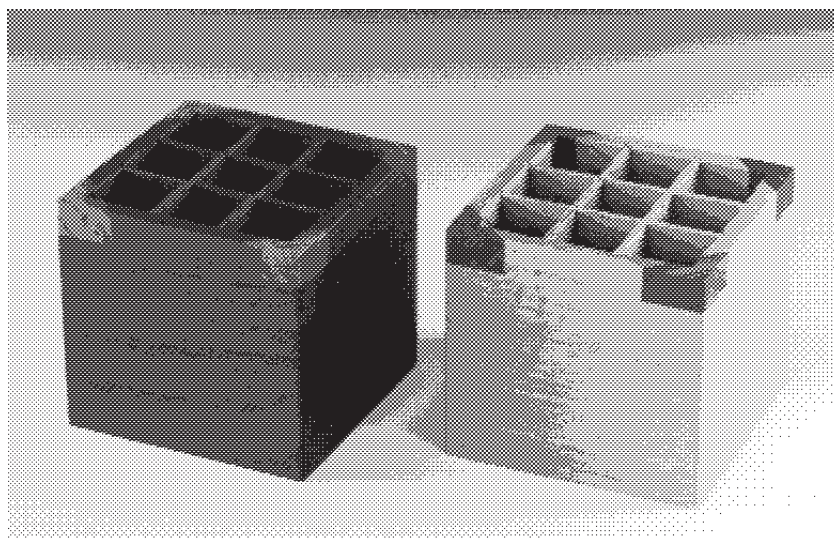
☆しみずあつし／呼人・森の家／網走



「箱」という言葉で思いうかべるイメージは、人によってそれぞれ違いますが、一般的には、弁当箱や薬箱など手にもてる大きさで、中に何か入っているという感じではないでしょうか。前号で書きましたように、私は木で「箱」を作るということを主な仕事としてきましたが、中に入れる「モノ」を想定してパッケージを作るというよりは、箱そのものが好きで仕事をしてきたように思います。玉手箱やパンドラの箱、あるいはドラエモンのお

なかのポケット(?)のように、何も入っていないようだけれどとんでもないものが出てくる・・・という、そんなイメージが好きです。閉じた壁で囲んで、その内部の空間を外界とは区別して、ときどき壁の一部を開いて内と外を

つなげてみる。するとその時、今まで分離していた空間が一つになって新しい空間が生まれる。そんな「変化」が好きなのかもしいないと思っています。そう考えると人の住んでいる家というものも立派な箱ですし、街の中のビルや街そのものも、あるいはこの地球も、人間の体だって「箱」と言えるのかもしれません。最近つきあいはじめたコンピュータも間違いなく異次元を内包したブラックボックスです。



今回もペン立てなのですが、前号でご紹介しました内部を対角線に仕切ったタイプは、ペンの立てられるスペースが少なくなるので、四角に格子状の仕切りを入れてみました。コーナーの付け木は、あらかじめブロックで作っておきv型の溝をルーターで掘って、1ヶずつ4カ所貼りつけます。本体のほうは箱に組み立ててから、この付け木の部分を欠きとるのですが、ブロックのv溝と欠きとりの部分が最初はなかなか合わず苦心しました。

上部が格子なので和風のイメージのペン立てにしたいと思い、それならばコーナーの付け木部分は、和筆筒の隅金具のような感じにしてみようと試みたデザインです。

PS-2

格子ペン立 (サイズ; 95 × 95 ×

90 ㎖; 1985 ~)

ナラ・クルミ (付け木はカリン材) ¥ 3,800

ウォルナット (同) ¥ 4,500

クラフト&デザイン タンノ

〒079 旭川市永山9条3丁目1-19

Tel,Fax. (0166) 47-3895

ABITARE FRESCO 陶・家具・織~暮らしをつくる

5/2(木)~7(火) 最終日16時まで

丸井今井/札幌大通り館8F まるい美術ギャラリー

札幌市中央区南1西2 TEL.(011)205-1151

陶 石山寿子

家具 高橋三太郎

織 福田律子





最近飛行機に乗ると電子機器の取扱についてのコメントが必ず流れる。CDプレイヤーとか携帯電話から出る電磁波がコンピュータでいっぱい飛行機の計器を狂わせるというわけなのだが、たしかにこのところ電磁波の障害は至るところで報告されているようだ。パソコンを使う人にとって電磁波の害の事は一応常識だが、それでもそれに対する対策を取っている人は少ないのではないだろうか。かく言う私も今この文をパソコンで打っているが、ちょっとモニターから距離を置くようにしているだけで無防備そのものである。

電磁波というのは電気製品からは必ず出ているものなのでいまさらなくすわけにもいかないものなのだが、この害については食品添加物とか農薬とか、放射能とか薬とかと同じように「はっきりしていない」とか「微量だ」という事を理由にきちりと語られていないところがブキミなものである。害のひとつは心臓のペースメーカーやマイコン制御のAT車のような精密機器の誤動作への影響、そしてもう一つがこれまた波動で成り立っている人体への影響である。「携帯電話で脳腫瘍」とか「電気毛布で異常出産」というようなことを聞いた事があると思うけど、これってかなり深刻な問題のようで、どうしてそうなるかについてをちょっと紹介してみたい。

簡単に表現してしまうと専門家は文句つけるかも知れないけど、「簡単」と言うのが大事なのでやはり簡単に言うと、「携帯電話は電子レンジになりうる」ということだ。電波の人体への影響の一つに発熱効果というのがあって、この原理を利用して電子レンジがあるのだが、人体の至近距離で使う携帯電話では電磁波で頭部が熱を持つということが考えられるというわけだ。血液が流れているところだと血が熱を運んで行くのだが、血液の流れの少ない眼球は熱を逃がすことが出来ず、白内障になると言われている。脳腫瘍については十分

に考えられるが現在調査中と言うところだそう。ちなみに眼球の他に血流の少ないところは「こう丸」で、レーダー技師には白内障の他に子供が出来ない人が多いとか、音響スタジオ関係者に女の子が多いなどということが経験的に言われている。電気毛布やカーペットでは電磁調理器の元になるジュール熱と言うのが体内に起きるそうで、カルシウムが破壊されたり免疫が落ちたりするという報告が出ている。それで異常出産との関係が調べられている。

私も最近簡易電磁波検知器というものを入手していろいろ測っているが、携帯電話でなくともテレビから、蛍光灯から、家中の電気製品から出ているので改めて驚いているところ。なくすわけにもいかないのとにかく「遠ざかる」ことしかないようだ。2ミリガウスを安全の目安とすると(スウェーデンの基準らしい)わが家では28型テレビは正面で120センチでオーバー。14型が90センチ。NECのパソコンが90センチ、MAC(SE/30)が60センチ、ワープロが50センチ、電子カーペットが70センチ、蛍光灯が20センチ、コピー機50センチ、電子レンジ50センチ、炊飯ジャー20センチというのが計測結果で、気を付ければ避けられる距離ではあるようだ。(電子カーペットの場合は空中浮遊しなければならないので、上に乗るときはスイッチを切るのだが)とにかく子供にはファミコンなどやらせないほうがいいし、妊娠初期の人などはより気を付けた方が良さそうだ。オール電化住宅は恐い。

しかし、こんなことを言っている私も今では携帯電話所持者である。入院していた父がベッドから友人に電話をするために購入したのだが、これは本人のクオリティー・オブ・ライフを高めてくれて役に立ち、感謝している。その後自分で使って助かることも多い。要するにリスクが知らされていないことが問題で、知っていれば避けることも少しは出来るのだ。携帯電話ではイヤホンで受信機から離れるという手もある。とにかくこの先どの様な影響が出るのか分かっていない人類初体験の電磁波の嵐の中に我々がいることだけは自覚して、なるべくスイッチを切るとか、離れるとか、使う時間を短くするとかしたほうがよさそうだ。

(参考図書「電磁波はなぜ恐いか」天笠啓祐 緑風出版)
(使用機器「DR.GAUSS」)

HUNTERCOMPANY,INC. U.S.A.)

☆みかみとしみ/MICABOX/札幌

『技術の黙示録』

講師／飯島孝（岐阜経済大学教授・産業総論、産業技術論）

■ 5月15日（水）18：30～20：30

■ 会場／ワールドレストラン3階（パンケトルーム）

札幌市中央区南1条西2丁目

Tel. (011) 241-2050

■ 参加費／¥2,000（飲み物付）

■ 参加予約→もの環境研究会事務局／高橋三太郎

〒002 札幌市北区拓北6-2-5-23

Fax. (011) 773-6676

■ 『技術の黙示録』というような本を「技術と人間社」から上梓しようとしています。

そのまえがきに、「技術が社会の生産力を増大させ、ひとは豊かで便利な暮らしを享受してきた。資本主義は技術を進歩させ、その進歩が資本主義の機能を発揮させ、拡大再生産を可能にした。しかし一方、技術失業と労働強化を生み、また資源の枯渇、使い捨て、さらに環境の悪化をすすめ、ひとの生存条件を左右するに至った。技術はいま暮れなんとし、ひた走り走り、終末に向かうのか、それとも、技術には輝く未来があるのか。技術が黙示する現代の課題はなにか。」と書きました。

この本で述べているアメリカ的生活様式～自動車と家電製品のある暮らしと複製の技術と文化について、今度のものけん（「研究＝「煙酒」）の会で話すことができたらと思っています。

（いいじま たかし）



HOUSE AND YARDS FOR SEVERAL BREEDS.

"Barns, Sheds & Outbuildings"

Alan C. Hood & Company, Inc. Original Edition 1881

■工房だよりの新学期

今号から「工房だより」は3年生です。これまで同様、隔月刊奇数月発行、したがって原稿は偶数月25日締切です。今年度の購読料を大勢の方に送っていただきました。また、札幌の武部實さんはじめ数人の方からは大口でカンパをいただきました。どうもありがとう、これからもよろしく！

■まちをもりにうめる

3月7日、朝日新聞「論壇」に「新首都は『森に沈む都市』をめざせ」という文が、佐藤栄佐久・福島県知事が私見を述べるという形で載りました。要旨は次のようなものです。

～今度の我が国の新首都は、いわば21世紀の首都であり、来世紀の新しい理念を実現する役割を担うことになるだろう。国会移転調査会報告などによれば、新首都は国会都市を中心にいくつかの小都市からなる「みどりに浮かぶ小都市群」としているが、私は21世紀の首都を基本理念とすれば、さらに一歩進めて、新首都は「森に沈む都市」としてはどうかと考えている。ここで「森に沈む」とは、単に物理的に森に埋没するという意味ではなく、元来人工物であった都市を、森、すなわち自然と限りなく融和・一体化させようということなのである。（中略）「森に沈む都市」は、外見、実質ともに、もはや人工物というよりは限りなく自然物に近く、まさに都市そのものが、人類の活動を技術と英知によって自然と共生できるものに変えていく壮大な試みとも言えるのである。「森に沈む都市」での生活は、今まで私たちが経験したどの都市生活とも、また田園生活とも違ったものとなるであろう。（後略）

これに対し、ぼくは次のようなラヴェター（!?）を書き、佐藤さんに送りました。

私は札幌市にて建築設計事務所を自営するものです。

先日の「論壇」の佐藤さんの論文を、たいへん興味深くかつ共感を持ちつつ拝見しました。といいますのは、私は自身街に暮らし、仕事の上でも街と密接に関わる日々をすごしながら、なかなか豊

かなものになっていきそうにない都市環境にジレンマを痛感して、5年ほど前から『都市は森に埋めるべし』ということに非常にマイナーにはありますが、吹聴してきたからです（参考書類別添）。今回佐藤さんが私と類似のイメージを持っておられることを知り、しかも知事という立場での御発言に、とても心強く・うれしく思いました。なぜ「沈める」までする必要があるのか、どんなふうに「沈める」のか、細かく検討を加えていく前向きの作業がこれから当然必要ですが、とりあえず今日の都市環境を改変していく展望・夢が、遠く福島にも「のろし」のように上がったものと、うれしく受け止めたいと思います。

ただ私としては、このイメージが、首都機能移転問題というようなビッグ・プロジェクトに反映され、強大なモデルとして他の「先を行く」新しい都市環境の出現というところでとりざたされるというよりも、今日どこにでも（それこそ福島にも札幌にも）設定できる、様々な「人類の生き方のモデル」のひとつとして取り上げられ、開拓していくべき素材ではないかと考えます。佐藤さんは佐藤さんなりに福島を森に沈めてほしいと私は感じます。その努力や実践が、はからずも「新首都」に反映されれば良いとしてはどうでしょうか。森に沈んだ、新しいイメージの暮らしの場所は、それを作り上げていく手法も新しいものでなくては...と思います。例えばあまり良くありませんが、よく地方都市で役所の建物ばかりが新しく立派なのに違和感を感じることがあります。首都が、美しく心地よいたたずまいとなることに異議はありませんが、まず人々の足元になるべく近いところからの改革を次の時代は優先すべきでしょう。そういう意味で私は佐藤さんに、とりあえず福島から「のろし」を上げつづけ、実体を作る努力をしてもらいたいと思うのですがどうでしょうか。私は私で、札幌で「のろし」を上げ続けることにいっそう努力したいと思います。そしてできることなら、「のろし」と「のろし」をつないでいくネットワーク（例えば『森都市ネットワーク』）を設定できたなら、各地が様々な情報交換をする中でそれぞれがより深く、強く、豊かなイメージを培うのに多いに役立つことでしょう。佐藤さん、その声かけ役なんてのどうですか？

すこしたって佐藤さんから次のような返事が届きました。

～私は知事に就任以来、景観づくりやゴルフ場規制、下水道整備等を推し進めるなど環境問題に取り組んで参りました。しかしながら、21世紀を目

前に控え、地球規模での環境破壊の問題が論議されている今日にあっては、環境に十分配慮した、環境への負荷が少ないライフスタイルの実現や都市づくりなどが必要であると思っております。このような認識の下に、21世紀のモデル都市となる新首都はかくあるべきという今回の新聞投稿を行ったものです。

地球の将来を見据え、「福島」から現在のライフスタイルを見直すべく、貴殿の言われる「のろし」を上げ続けていければと思いますので、今後ともどうぞよろしく御指導願います。



TRADYCYJNE BUDOWNICTWO DRZEWNE W POLSCE
Wydawnictwo NERITON / Warszawa 1995

あとで考えてみれば、新首都なるもの自体必要なのかどうか、国そのものの役割という観点から再考の必要がありそうです。また少しうがった見方もかもしれませんが、これまでは工業に寄りかかりすぎたので、今度は自然におんぶしようとするような風潮が、このところ至る所に出てきているように感じます。建設省はじめ行政なども推進しようと言っている「環境共生住宅」についても、それ自体は魅力的...窓をあければ一面の緑、コンピューターがあるから在宅勤務で...しかも私たち建築関係者としては、さあ新しいオシゴト。でも、何か足りない。3～40年前にまぶしく見えた郊外の団地の小奇麗な暮らしの位相とどう違うのか...。地球規模で環境を考えるとこいつつ、地球の反対側の人々とどんなふうに関わりあえ、連携できるのか？いやいや、隣人あるいは自然とも...。

少なくとも、そのようなことに対する試行錯誤を、誰かにゆだね・ぶら下がる時代ではすでになさそうです。都心にぎくしゃくと山羊の鳴き声がこだまするとき、チェチェンの人々に笑顔が少しもどってくる...という、ちょっと強引な想像力を喚起しながら、ぼくは遅い雪解けの野に立とうと思えます。

追悼、ドゥダエフはじめ多くのむだな死に。